

NPO法人「森と海の学校」主催の「子ども自然体験スクール」に参加した高木真琴さん（常盤中学2年生）が平成25年度「全国少年の主張」中四国地区代表として全国大会に出場しました。

【全国少年の主張発表文】『手紙の力』

引き出しの奥にあった便箋。最近では手紙を書くことはありませんでした。携帯電話があれば友達への連絡も、「ありがとう」「ごめんね」の言葉も指先で簡単に伝えられるので、不自由なことはありません。返事もすぐ返ってきます。

考えてみると、年賀状でさえ手書きの物は少なくなりました。挨拶文も住所も印刷され、手書きのメッセージが一文あればいい方です。慌ただしい年末に、心をこめる余裕もなく作業的に書いていました。

字を書いて伝えるということがなくなっていた、そんな中、春休みに行なわれた子ども自然体験スクールに参加しました。

このスクールには、携帯電話を持つていくことは禁止されています。一週間、親や学校の友達と離れ、連絡もとれません。いつものメールもできません。ですが、不思議なことに寂しさは感じませんでした。スクール三日目の夜に、「親子の絆」について講話がありました。指導者の若い頃の体験談です。手作りヨットで単独太平洋横断を決意し、その思いを両親へ伝えた時、大変反対されたそうです。しかし、思いは強く諦めきれない。お父さんとの会話もなくなり、出発の日も見送りに来てくれた両親と会話することなく出航。

ところが、お母さんからのお弁当を開けた時、一枚の紙が入っていたそうです。一枚はお母さん、そして、もう一枚はお父さんからの手紙。お父さんはただ一文書いていたそうです。

「生きて帰れ」と。

このわずか五文字にお父さんの愛情を強く感じたと言われました。そして、何度も読み返し、両親への感謝の気持ちと、「行つてきます。」と言わなかったことを後悔し、涙を流したそうです。

この講話の後、一人一人に親や家族からの手紙を渡されました。突然の手紙に皆驚きました。暗い部屋の中で、懐中電灯の小さな灯りのもと、それぞれ家族からの手紙を読みました。

皆、泣いていました。私も涙があふれて止まりませんでした。中学生になり、母とよく喧嘩をして、口をきかないことも多くなりました。そんな私に母から手紙が届くとは思ってもみませんでした。驚きました。

そこには、スクールに参加させた母の思いが書いてありました。「転校したこともあり、友達関係にとつても悩んだこの一年。学校に行くことがつらかったこともあり、いつも喧嘩ばかりしていたね。そして、じきに笑顔を見せることもなくなり、暗くなる一方だったね。だから、このキャンプでたくさんの楽しいことをして笑顔で帰ってきてね。」と私をはげますような力強い文字でした。

私は、どうして喧嘩ばかりしていたのだろう。母の気持ちも考えずに、自分の言いたいことばかり言ってきた。それでも母は私を心配している。改めて家族の大切さを知りました。周りの友達も手紙を読んで感謝や反省をしていました。私も友達も皆涙があふれて止まることはありませんでした。

手紙のもつ力。手紙は素直な気持ちを与えてくれる。一文字一文字に心がこもっている。手紙を書いているとき、相手のことを思っている。「生きて帰れ」たった五文字で、お互いの気持ちがつながる。自分を振り返るチャンスを与えてくれる。

母の手紙がなかったら、母の気持ちなどもなく反抗するばかりだったことでしょう。顔を見て言いにくい時、文字が心を伝えてくれる。それは、相手のことを考えながら書き、書き間違ったら書き直すという作業の中で、気持ちが「文字」に表れるからではないでしょうか。

あの日の母からの手紙がメールであれば、あれほどの感動、驚き、涙することはなかったかもしれません。毎日家事と仕事で忙しい中、手紙を書いてくれたと思うと、本当にうれしかったです。

今でもスクールの友達と手紙の交換をしています。皆、手紙のもつ力を感じたからでしょう。小学校の友達にも手紙を書いてみました。すると、手紙で返事が戻ってきたのです。忙しい中学校生活の中でも懐かしい文字と絵が書いてありました。やはり、手紙はうれしいものです。相手の顔を思い浮かべながら郵便ポストに出す楽しみも、友達からの手紙を待ち郵便受けを見る楽しみも増えました。メールももちろん便利ですが、手紙という古風なものまた一層いいものだと感じています。

